
トゥアレグ族と“音楽のゲリラ” ——音の織りなす肥沃な大地

Mousiké 編集室 (Art-Phil)

サハラ砂漠の遊牧民・トゥアレグ族による“砂漠の音楽”は、音の悦びに満ち溢れていた。灼熱の過酷な環境下で地戦を生き抜くこと。あるいは、誇らかな笑みをもって愛を語ること。“砂漠の音楽”の可能性の中心はそこにある。

張りつめた沈黙のなか、長身の男が縦笛「タザマルト」を徐に奏でる。滑らかに絡み合う顫動音とともに旋律が立ち現れ、確かな存在感を伴って無音の空間を横切る。静寂に包まれた闇、サハラの金色の砂、安息のテントを模した舞台上、野性に満たされた交感の宴が始まった。

「タザマルト」のしなやかな旋律を、一弦楽器「イムザッド」の乾いた旋律と老女の豊かな地声が迎える。旋律の掛け合いを背景に、舌を顫わせて発せられる若い女の金属的な嬌声に全身を奮わせて発せられる若い男の硬質な叫声が呼応する。楽器から奏でられる旋律に交叉する純粋な音響としての嬌声／叫声。音の微小な振動が声となり、愛の言葉へと実を結び、旋律として歌われる。あたたかも、音楽の始原に立ち会っているかのようであった。

その刹那、打楽器「ティンデ」の円みを帯びた音が女たちによって唸々と打たれる。手拍子「ハンドクラッピング」の軽やかなパルスが続き、祝祭のリズムが紡がれる。宴が進むにつれて、太鼓の「ガンガ」や「ジェ

リカン」のより重厚な打音が加わり、鳥の声のような女たちの嬌声が折り重なり、重層的なリズム群が砂紋のように広がる。観客席に居合わせたトゥアレグ族の嬌声が応答し、聴衆の「ハンドクラッピング」が湧き上がり、個々のリズムを打ち鳴らす。

豊穡な音の襲を弦楽器の「ウード」や「エレキギター」の旋律と男の叫声が貫くとき、交感の宴は最高潮に達する。ポリリズムの沃野に黒装束の男と白装束の男が踊る。「タザマルト」や嬌声の響きと同じくする顫動が全身を支配する。ブラジリアン・サンバのゼロ度がここにある。咽ぶようなリズムの狂騒のなか、交感の踊りを囁す嬌声／叫声の応唱は揺らぎつつもシンプルな旋律へと収束する。無数のリズム群から歌が生まれる瞬間、“砂漠の音楽”に邂逅する。

今、ホールはカオスの直中にある。聴衆は立ち上がり、舞台に駆け上がり、リズムの過剰に身を委ねる。トゥアレグの野生を帯びた男女と日本の幼さを残した男女が交感の踊りを共にする。魔術的なリアリズムをともなって、ある魅惑的な光景が出現する。やがて、トゥアレグ族の圧倒的な勝利とともに交感の宴が終わる頃、レゲエのリフレインが愛と闘争のアンコールとして奏でられるだろう。

今宵、実験音楽の一拠点・草月ホールにおいて“音楽のゲリラ”が展開された。■

第24回<東京の夏>音楽祭2008 森の響き・砂漠の声 (2008年7月18日)

<砂漠の音楽>サハラの声〜トゥアレグの伝統音楽

サハラ砂漠の遊牧民・トゥアレグ族の音楽家たち、他
草月ホール [東京都港区]

①トゥアレグの伝統音楽